

イタリア古寺巡礼

——美と思想の遍歴——

オリヴィエーロ・フラットリッロ

要 約

Quella dell'Italia, e dell'Europa più in generale, fu per Watsuji Tetsurō un'immagine composta che trovò il suo fondamento nella fusione tra sensibilità ed intelletto e nella correlazione tra estetica ed etica. Il presente contributo si concentra su questi due aspetti che hanno contraddistinto l'esperienza italiana del filosofo.

Il percorso seguito appare articolato su tre livelli diversi: l'Italia come “paese storico”, come paese d'arte e, quindi, come espressione del proprio *fūdo-sei*. Al bagaglio di immagini estetiche preconcepite con cui Watsuji partì per l'Europa si sovrappose lo stupore del reale che trasformò l'“immaginato” in “concreto”. A ciò si contrappose, d'altro canto, la sua assoluta “verginità dello sguardo” verso gli aspetti naturalistici, elemento cruciale della sua peregrinazione. Si configura così un orizzonte complesso che parte da un approccio empirico per approdare ad un nuovo universo ontologico.

キーワード：風土性，間柄，倫理学，芸術，日本におけるイタリアのイメージ

「……ローマはやはり古代の遺跡だと思った。ルネッサンスのものなどは影が薄く、ローマ時代の巨大な建築と、ギリシアの彫刻とが、おもにわれわれに迫ってくる。」¹⁾

永遠の都の美しさを前にした和辻哲郎は、こう「イタリア古寺巡礼」に書いています。

1927年12月21日、セーナ川の岸辺で旅立つことを決心した和辻は、そのままマルセイユからニース、モンテカルロを経由して、あこがれの土地に足を踏み入れました。彼は三ヶ月の間イタリアに滞在し、あちらこちら熱心に見て回り、1928年3月ヴェネツィアを最後に、イタリアを後にします。

「イタリア古寺巡礼」には、時間的な順序どおり、ほとんど毎日のように旅の出来事が記されています。過去の記憶と芸術に満たされた土地を歩く和辻には、前世紀初めの偉大な旅行家の精神があり、芸術や自然、歴史を研究する風景画家のような優雅な眼差しがあります。そして現在の矛盾をも見過ごしてはいません。旅行記の体裁を持ちながら、和辻らしい細部への注意も欠けてはいません。芸術に対する深く鋭い感受性をもった彼が、情熱を込めて色彩やフォルムについて書けば、読者は思わず引き込まれてしまいます。和辻は、しばしばイタリア、広くはヨーロッパと日本の文化を比べていますが、それは何よりもまず、当時のイタリアが<他者>

の目にどのように映ったかを知るための貴重な証言となりました。

本書を貫いている要素は三つあります。第一に、訪れた教会や史跡の綿密な描写と個人的観察、芸術的伝統に加え気候や自然に関するイタリアと日本との比較、そして自然の風景や気候的特徴や町と町の違いの正確な描写です。つまり和辻は、次の三つのレベルを組み合わせながら、イタリアの美と自然をとらえていきました。

- 1) 歴史の国としてのイタリア
- 2) 芸術の国としてのイタリア
- 3) 風土としてのイタリア

歴史と芸術には密接な関係がありますが、歴史はあまり語られていません。それはおよそ芸術や風景についての話題を広げるものでしかありません。例えば、険しい丘の上にそびえる村落のポジションが歴史によって説明されてもいますが、たいていはイタリアの芸術遺産（絵画、彫刻、建築）を解釈するためのものです。

フィレンツェのシニョーリア広場で、和辻は次のような光景に出会います。「今日の日曜日には、ファシストの首領株のトゥラティという人が来るとかで、この広場は大変なお祭り騒ぎであった。」²⁾ こういったエピソードもまた常と変わらない口調で書かれていますが、ファシズム時代の真っ只中にあった当時のイタリアの様子を端的に伝えています。和辻にとっては、訪問以前に抱いていたイタリアのイメージの上に重なるようにして現われたイメージでした。実際「イタリア古寺巡礼」は、彼が夢にまで見た土地の、そのイメージの<トポス>を描いていますが、<イメージ>が<リアルなもの>になり変わり、抽象が具体化する瞬間の、心の奥底から湧き上がる驚きをも見せています。さまざまな場面で和辻は、信じられないといった声をもらします。たとえば、今触れたフィレンツェのシニョーリア広場では、

「イタリア人は祭り好きのせいでこういうことをやるのもあろうが、しかしそれにして
もファシズムがこんなに繁冒していようとは、全く案外であった。」³⁾

と言い、あるいはまた、ローマのシステリーナ礼拝堂に立ったときは、恍惚としてこう言っています。

「ここの絵のことはいろいろと紹介で知ってはいたが、この堂内の気分というふうなものを
ついで想像していなかったからである。」⁴⁾

このような驚きは、イタリアについて和辻が持ち始めていたイメージと深くつながっています。つまり<現実の国>ではなく<博物館の国>であり、その国を訪れる人々を迎えるのは何よりも芸術だったのです。おそらくそれゆえに、この旅行記にはいわゆる自伝的な内容がほとんど見られないのでしょう。実際、彼の巡礼は、芸術や風景を前にして呼び起こされた感情の記録になっています。当時の教養人として和辻は、イタリアの芸術と雰囲気に関して、すでに様々な知識を抱えていました。そして自らの足でその地を踏み、美しい自然と芸術に豊かなイタリ

アを眼前にして、故郷日本との類似と相違について思いを廻らせます。和辻の視線が常に風景、風土、芸術へと向かうのは当然のことでした。もっとも、人々の風俗習慣に対する観察も多少なりともあります。パリで彼は、フランス人は社交のためにオペラを見に行き、ドイツ人はただ良い音楽を聴きたいがために行く、と書いています。そしてフィレンツェでは、市内を行進するファシスト少年隊に目をとめています。

「イタリア古寺巡礼」で和辻が描いたイタリアのイメージは、旅行記に典型的な幾つかのトポスを反映してもいます（それはとりわけヨーロッパでおこなわれたグランドツアーを特徴づけたものですが）。この意味で象徴的なのがポンペイ訪問です。考古学的な出土品は、期待とは異なり、古代のイメージを歪めるようなものだったので、和辻は幻滅を感じるのです。

「一日見て回ってもあまり詳しく見ることはできないくらいである。が、芸術的に非常に印象の深いものがあるかという点、どうもそうはいえない。」⁵⁾

事実ポンペイのことが書かれているのは、わずか一ページ。ほんの数行で彼は世界的な芸術と考古学の聖地のひとつに背を向けてしまいます。

他方で和辻をすっかり魅了した美がありました。彼の美学の絶対的な核となるギリシア芸術です。ところでギリシアの芸術を美的完成の頂点と見る彼の判断は、イタリアの博物館や教会で目にしたローマ時代のコピーに基づいています。和辻にとってイタリアはいわば卓越した芸術の避難所なのです。アグリジェントの神殿の谷で、カストルとポルックスの神殿やコンコルディア神殿を前にして、彼はこう書きました。

「石材は材料自身においていかにも死んだ感じのものである。従ってこの材料を生き生きとさせること、その中に生命を吹き込むことに非常に努力しなくてはならぬ。ギリシア人はこの努力に力を集中している。……それは、石材を完全に征服して、生きたものになっている、ということであった。」⁶⁾

古代のギリシア文明について、パレルモの国立考古学博物館に収蔵されたセリヌンテの神殿の遺物に心を動かされた和辻は、次のように書いています。

「ギリシア人のやったことは、どうも実に例外的、天才的である。どの民族でもそういう風に行くわけではないであろう。……そういう民族が傍らにおり、その民族の仕事によって教育されたということは、地中海沿岸諸民族の、ひいてはヨーロッパ全体の、非常な幸福であったといわなくてはならぬ。そういう点からもギリシア人の偉さをつくづく感ぜざるを得なかった。」⁷⁾

「イタリア古寺巡礼」には、作品の真偽をいかに正確に判定するか、本物のギリシア彫刻なのかローマ時代のコピーなのか、制作年代の特定が困難かつ不可能に近いことについて、和辻が雄弁に語る部分もあります。それはおそらく、多くの美術史家たちと同じく、和辻にとっても、

その眼差しのもとに息を吹き返すギリシア彫刻が、完全な美の絶対確実なシンボルとなっていたからでしょう。しかし、過去のすばらしい彫刻を見ることができ、あの精神的な美とあの永遠の春に触れることのできる国は、矛盾に満ちた不協和音を奏でていました。

「このホテルはナポリの海岸にある。前にかなり広い公園があって、その外が海沿いの散歩道路である。なかなか景色はいいが、しかしローマに比べると恐ろしく人気が悪い。」⁸⁾

和辻のなかのイタリアのイメージは、感性と知性の調和的融合、美と思想の結合に支えられています。先に触れたように、彼はすでに西洋美術の知識をもってヨーロッパへと出発しましたが、西洋の風土については完全に「白紙の状態」で到着しています。これが和辻の巡礼にとって決定的でした。ローマのサン・ジョヴァンニ・イン・ラテラーノ教会のキオストロ（回廊）をゆっくりと眺めながら、

「イタリアでゴシックが勢力を持ち得なかったということは、よほど意味のあることらしい。またしてもそれが、太陽の明るい、南国的な風土と関連して考えられる。」⁹⁾

と語る和辻は、イタリアの旺盛な生命力と太陽の国イタリアというトポスとを結びつけ、「イタリアは北方の人から見ると太陽の国、青空の国で……」（和辻哲郎「イタリア古寺巡礼」岩波文庫、2001年 P.110）と書いています。しかしイタリアの自然のイメージは、もっと広く複雑な地平を開いていき、後に和辻の〈風土学〉を实らせるのです。この旅行記を読み進めることは、政治化という言葉でクリストファー・ジョーンズが定義したような意味で、次第に政治化する彼の内的な歩みを理解すること、そして、〈他者〉を探検しながら〈風土〉とアイデンティティの関係を定めようとする試みを把握することです。どのようなイメージも他者との対比を通して形成され、〈他者〉について語ることは、自己を発見する方法でもあります。「イタリア古寺巡礼」もまた、自己と他者を巻き込んで進むこのメカニズムに従っています。しかし和辻の場合は、旅と日記という泉から湧き出した対比が、豊かな哲学的考察へと流れ込んでゆくのです。

気候風土がイタリア人の容貌や性格に与えた影響について、和辻が語っているところを見ましょう。ローマのアヴェンティーノの丘へ出かけたときです。

「もう一つ北方から来て著しく感じずるのは、人の顔の色の黒いこと－日本人そっくりなものもある－それから体の小さいこと、北方人のようにぬうっと落ちついていないで、せかせかしていることなどである。これはどうも風土的性格というほかはない。」¹⁰⁾

さらに続けて、

「……生活全体が暑さに規定される。寒い国では体をひきしめる習慣がつくが、暑い国ではだらける場合が多い。ひきしめる習慣は体格をよくするであろうし、だらける習慣は体格を悪くする。だからドイツ人にはいい体格をしている人が多い。女でもそうである。イ

タリア人には日本人と同じくらいに貧弱なのが多く、ことに女に日本風の痩せ方をしたのがある。ドイツ人が勤勉で、イタリア人が怠け者だといわれるのも、これと関連しているであろう。ドイツ人は神経が遅鈍なのではないかと思われるくらいで、なかなか疲労を見せないが、イタリア人はすぐ興奮する代わりに疲れやすい。こういう点で日本人とイタリア人とは似ている。」¹¹⁾

和辻の言うイタリア人氣質は、しばしばステレオタイプですが、土地の人々との触れ合いに楽しげな彩りをそえることもあります。イタリア人はときには騒がしく、しつこく、おせっかいな人間になりますが、そんな場合でも重苦しくはならないのです。たとえばチェルヴェトリでの昼食会の場面がそうでした。

和辻は、観念的なアプローチを通して、日本から遠い歴史的文化的なコンテクストの内に他者を概念化してゆきます。事実この旅行の経験は、彼の次の思想的段階にとって非常に重要なものとなります。それはただ単に地理文化的な視点ではなく、まさに存在論的な意味を獲得するのです。言い換えれば、ヨーロッパとその気候条件に彼は疎外感を抱きます。日本の空を吹きはらう太平洋の風に比べて、地中海の空気はどんよりとしていました。後に『風土』のなかで和辻は地中海を「砂漠の海」、「広大な塩水湖」と表現しています。それは、かつてオデュッセウスやアエネアスが活躍した「生命あふるる海」という、西洋世界がもっているイメージとは正反対です。そして気候は、人間をとりまく自然環境ではなく、人間の主観的な実存の表現として研究されます。例えば家屋の建築様式は、＜風土性＞のなかに生きる人間の自己了解の表現なのです。

時折、地中海の美しい眺めが、日本の風景との意外なアナロジーを呼びおこすこともあります。しかし全体としては相違が類似を圧倒的に上回り、こういった相違をもとにして、和辻の思想は発展していくのです。ともかく「イタリア古寺巡礼」においてすでに、「風土」と「倫理学」における中心概念、＜風土性＞、＜間柄＞という概念が顔を見せています。和辻はトラジメーノ湖を見て、こう書きました。

「この湖水から少しフィレンツェの方へ行ったところで、汽車からながめっていると、沿線の石垣に白い苔のついているのが眼についた。日本で石灯籠などに普通に付いているあの苔である。これもヨーロッパに来てから初めてであった。すべてこういう野や山や水や石の風情が結局湿気のいくらか多いことを語っているのである。湿気が多ければ植物が繁茂し、植物が繁茂するに従っていくらかずつ日本に似たものが出てくる。日本の自然と文物とが湿気に関係するところの多いのを今更つくづくと感じさせられる。」¹²⁾

「イタリア古寺巡礼」にはこのような描写がたくさんあり、イタリアと日本の環境の類似や相違をはっきりとさせ、納得のいく説明を与えようとしています。山や谷の形態の違い、植物の違い、草花の形や色の違いなど、しばしば長い考察の対象となります。そして、経験的なアプローチに始まった彼の思想は、新しい存在論的な地平へとたどり着きます。「風土」から引用すれば、

「歴史性が風土性と相即せるものであり……。道具としての衣食住が風土的性格を帯びることは言うまでもなく、さらに根本的に、人間が己れを見いだすとき、すでに風土的規定の下に立っているとすれば、風土の型はやがて自己了解の型とならざるを得ないであろう。」¹³⁾

つまり<巡礼>の結論は「風土」に書かれています。しかしそれは「イタリア古寺巡礼」からも容易に導き出せるものです。

要するに和辻にとってイタリアは、新たな愛情を抱いて日本へ帰ることを促すものでした。時折、ある種の孤独、疎外感、あるいは単なる憂鬱かもしれませんが、そういった気分が『イタリア古寺巡礼』のページにあらわれます。パレルモに到着したばかりの和辻は、次のように書きます。

「この日は空がどんより曇っており、アーモンドの花の景色もあまり朗らかでなかった。空が曇ると心も同じように曇って来て、哀愁の気持ちに襲われるからかも知れない。」¹⁴⁾

憂鬱な気分がとりわけ巡礼の最後のほうを埋めています。美と思想のイタリア巡礼は、ここに来てデカダンスの雰囲気にも包まれるのです。ヴェネツィアで発病した和辻は、イタリアを去る決心をします。最後の言葉は、プラグマティックな精神に浸されていて、旅行記という記録文書的な性質を今一度確認するかのようです。

「早くマラリヤの蚊のいないところへ行こう。そういう気持ちで、急いでサンゴタルドを超えスイスのルツェルンへ出た。そうして湖水の美しい景色をながめつつ復活祭を迎え、毎日キニーネを飲んだのである。」¹⁵⁾

注

- 1) 和辻哲郎, 「イタリア古寺巡礼」, 岩波文庫, 東京:2001年, 52頁
- 2) 和辻哲郎, 「イタリア古寺巡礼」, 岩波文庫, 東京:2001年, 173頁
- 3) 和辻哲郎, 「イタリア古寺巡礼」, 岩波文庫, 東京:2001年, 182頁
- 4) 和辻哲郎, 「イタリア古寺巡礼」, 岩波文庫, 東京:2001年, 88頁
- 5) 和辻哲郎, 「イタリア古寺巡礼」, 岩波文庫, 東京:2001年, 120頁
- 6) 和辻哲郎, 「イタリア古寺巡礼」, 岩波文庫, 東京:2001年, 145頁
- 7) 和辻哲郎, 「イタリア古寺巡礼」, 岩波文庫, 東京:2001年, 158頁
- 8) 和辻哲郎, 「イタリア古寺巡礼」, 岩波文庫, 東京:2001年, 119頁
- 9) 和辻哲郎, 「イタリア古寺巡礼」, 岩波文庫, 東京:2001年, 107頁
- 10) 和辻哲郎, 「イタリア古寺巡礼」, 岩波文庫, 東京:2001年, 96頁
- 11) 和辻哲郎, 「イタリア古寺巡礼」, 岩波文庫, 東京:2001年, 97頁
- 12) 和辻哲郎, 「イタリア古寺巡礼」, 岩波文庫, 東京:2001年, 179頁～180頁
- 13) 和辻哲郎, 「風土」, 岩波文庫, 東京:2001年, 26頁
- 14) 和辻哲郎, 「イタリア古寺巡礼」, 岩波文庫, 東京:2001年, 146頁
- 15) 和辻哲郎, 「イタリア古寺巡礼」, 岩波文庫, 東京:2001年, 252頁

引用文献

- 和辻哲郎, 「イタリア古寺巡礼」, 岩波文庫, 東京: 2001 年
和辻哲郎, 「風土」, 岩波文庫, . 東京: 2001 年

参考文献

- 唐木順三, 『和辻哲郎』, 近代日本思想体系, 千曲書房, 東京: 1975 年
坂部恵, 『和辻哲郎』, 岩波書店, 東京: 2000 年
湯浅泰雄, 『人と思想: 和辻哲郎』, 三一書房, 東京: 1973 年
津田雅夫, 『和辻哲郎研究』, 青木書店, 東京: 2001 年
和辻哲郎, 「人間の学としての倫理学」, 岩波書店, 東京: 1997 年
湯浅泰雄, 『和辻哲郎 - かくれたる自我 - 』, 近代日本の哲学と実存思想, 創文社, 東京: 1970 年
湯浅泰雄, 『和辻哲郎。近代日本哲学の運命』, 千曲学芸文庫, 東京: 1981 年
Carlino, Tiziana, “The ‘Levant’ : a Trans- Mediterranean Literary Category?”, *Trans - Revue de Littérature Générale et Comparée*, 2006 : 2, Juin, pp. 1-10
(http://trans.univ-paris3.fr/article.php3?id_article=116)
Isamu, Nagami, “The Ontological Foundation in Tetsurō Watsuji’s Philosophy: Kū and Human Existence”, *Philosophy East and West*, Vol. XXXI, 1981
Jones, Christopher S., “*Interman* and *Inter* in International Relations: Watsuji Tetsurō and the Ethics of the *Inbetween*”, *Global Society*, Vol. 17, N. 2, April 2003
Jones, Christopher S., “Politicizing Travel and Climatizing Philosophy: Watsuji, Montesquieu and the European Tour”, *Japan Forum*, Vol. 14, N. 1, 2002
Jones, Christopher S., “The Philosopher Remembers Home: Watsuji Tetsurō and the Imperative of Climate”, *The East*, Vol. XXXVI, N. 5, January-February 2001
LaFleur, William, “A Turning in Taishō: Asia and Europe in the Early Writings of Watsuji Tetsurō”, in J.T. Rimer, *Culture and Identity. Japanese Intellectuals During the Interwar Years*, Princeton (NJ), Princeton University Press, 1990
LaFleur, William, “Buddhist Emptiness in the Ethics and Aesthetics of Watsuji Tetsurō”. *Religious Studies*, 1978, N. 14
Mazzei, Franco, *Japanese Particularism and the Crisis of Western Modernity*. Venezia: Università Ca’ Foscari Venezia, 1999
Scotti, Massimo, *Gotico Mediterraneo*, Reggio Emilia - Napoli: Diabasis – Dante&Descartes, 2007